

## こども館で行う教育普及事業の一つについて

藤沢市湘南台文化センターこども館 二階堂 宏範

### はじめに

藤沢市湘南台文化センターこども館(以下、こども館)は、1989年(平成元年)7月に開館し、間もなく30年を迎える。私は、2001年(平成13年)に採用されて17年目を迎え、その間には庶務、展示、宇宙劇場、ワークショップとこども館の全ての担当を経験し、現在は宇宙劇場以外の担当を兼務している。この稿では、こども館で行う教育普及事業の一つと題し、ワークショップで私が担当している講座のこれまでとこれからについて、2017年(平成29年)2月25日に開催された神奈川県博物館協会主催講演会「知っておきたい博物館の話 学芸員の現場」で話した内容を基に記しておく。

### こども館について

こども館は、子どもを対象とした博物館になるが、残念ながら多くの方々に存在を広く認知されているとは言い難い。まずは、こども館について記すことにする。

「こども」「地域」「対話」の三つの基本理念の下「創造する文化」の拠点施設として築かれた藤沢市湘南台文化センターの「こども」の部分を担当施設としてこども館が開館した。こども館の他は、「地域」の部分を担当「市民センター・公民館」、「対話」の部分を担当「市民シアター」があり、それぞれ業務も運営する団体も異なっている。

こども館の年間利用者数は近年19万人程度で、平成28年度は192,246人であった。運営にあたる職員の数は管理職を含め7人で、庶務、展示、宇宙劇場、ワークショップの担当に分かれて業務を遂行している。事業は三つに分かれており、展示担当が展示ホールを活用し季節に合わせた事業の実施や展示物の管理を行い、宇宙劇場担当がプラネタリウムの投影や星空のコンサートなど天文に係る各種イベントを行い、ワークショップ担当が子ども達の興味や関心のきっかけづくりとして様々な教育普及事業の講座を年間200回程度行っている。

### ワークショップの事業について

現在、ワークショップの事業は、大きく分けて子どもの居場所づくりとして平日の放課後に行っている放課後ワークショップ、当日来館して気軽に参加できるオープンワークショップ、事前申込みで学習的要素を高くしている申込制ワークショップで構成し、私を含め二人の職員で対応している。

私とワークショップとの関わりは、2005年(平成17年)からで13年が経つ。採用当初からワークショップの担当ではなく、また、学芸員の資格を有していたわけではない。大学では経営を学び、教育を学んでいない全くの素人が教育普及事業の一端に関わることとなった。

そんな素人だった私が今回講演の機会をいただくきっかけとなった「市民協働」、「学生ボランティアの活用」、「連携事業の実施」という特徴を持つ事業を実施することになったのは、計画的なものではなく、結果的に生まれたというのが正直なところである。

### 分析と分類から新たな展開へ

仕事の内容が事務中心の庶務担当から直接子ども達と関わる現場中心のワークショップ担当になった時には、不安でしかたがなかった。最大の不安は、経験の無さと状況が見通せないことである。経験の無さは地道に経験を積むしかないと諦めたが、状況を見通すには何らかの方法があるのではないかと考えた。

一通の講座への申込用紙を見ていた時、そこに貴重なものがあると気づいた。当然のことだが、申込用紙には住所、氏名、学年が記載されていた。一通では単に個人の情報でしかないが、講座ごとに情報を整理すれば申込状況の傾向が、年間で整理すればワークショップ事業の申込状況の傾向が把握できると確信した。それから、一つ一つの申込用紙のデータの洗い出し作業が始まった。定員20人のところ申込みの多い講座では300人近い申込みがあり、男女比、学年比、地域比、新規とり

ピーターの比率などの情報に落とし込む作業は、決して楽ではなかった。想像以上に手間はかかったが、申込者の状況を把握することができた。

また、申込者の状況だけでなく、講座の状況を理解することも必要だと考えた。こども館の展示コンセプトの一つに「おもちゃ箱をひっくり返したような展示」がある。ワークショップの講座についても、16年間の歳月を懸けておもちゃ箱をひっくり返したように様々な講座が展開されていた。それらを整理し分類することで、何かが見えてくるのではないかと期待した。分類は、大きく自然科学と人文科学の二つに分け、さらに細かく八つに分けた。

申込者の分析と講座の分類をすることで、事業の新たな展開のヒントを発見した。「自然科学の講座は人気があるが、ほとんど実施していない」というものだ。理由は、こども館に天文以外に自然科学の知識を持っている職員が居ないこと、職員の数が限られている中で人手が掛かる事業の実施は難しいことであった。

## 二つのステップから講座へ

新たな展開のヒントと課題が明確になったことで私の進む道が示され、見通しが立ったように思えた。当時の環境としては、開館から15年が過ぎ「何か新しい事業を」と求められる状況と私にしかできない講座をつくってみたいという思いが重なり、すぐに行動に移すことができた。私の行動は、二つのステップで進んでいった。第1のステップは、足りない知識と経験を身に付け、情報が得られる環境をつくる。第2のステップは、第1のステップを基に方向性を確立させることだった。

第1のステップでは、まず大学に入った。自然科学に対して知識が乏しいので学ぼうと思ったからである。また、学芸員の資格もここで取得することとなり、学芸員実習では新江ノ島水族館に大変お世話になった。経験を身に付けるためには、藤沢市域を拠点とする団体の活動に参加させてもらった。藤沢メダカを活用し環境教育を行っている「藤沢メダカの学校をつくる会」、市内で定期的に自然観察会を実施している「大庭自然探偵団」、自然環境をテーマに活動している団体が集まる「藤沢市自然環境懇話会」など様々な団体の活動に参加させていただき経験を積んだ。情報を

得られる環境の構築には、神奈川県博物館協会の研修とその情報交換会の参加が礎になっている。ここで築いた人間関係は、貴重な財産になった。

第2のステップでは、当時話題になり始めた指定管理に備えることも視野に入れ、講座の方向性を検討した。「直ぐに」「誰でも」「簡単に」にならない新規事業者の参入障壁になり得る講座をつくるが必要だと思った。第1のステップで「知識」「経験」「情報」を得る中で様々な人達との出会いがあり、地域で活動している専門的知識を持った個人や団体の「人的資源」、地理的要因が育んだ自然・文化・産業・歴史などの「地理的資源」、大学・博物館・研究所などの「知的資源」といった貴重な資源が身近にあることに気付かされた。今まで見えていたのに気付かなかった「地域にある資源」を有効に活用することで、直ぐに誰でもが簡単にはできない独自の講座がつけると確信した。この三つの資源の活用が私の講座の基本的な方向性となった。この方向性から自然に生まれた特徴が「市民協働」「学生ボランティアの活用」「連携事業」になる。

私が担当している講座は、現在、次の6講座になる。具体的にどのようにできたのかななどを事例として6講座の内二つを例に記すことにする。

- ・飼育員さんとゾウさんペーパーを作ろう  
(横浜市よこはま動物園ズーラシア連携講座)
- ・藤沢メダカと遊ぼう  
(藤沢メダカの学校をつくる会協働講座)
- ・セミの羽化を見に行こう！  
(藤沢市みどりいっぱい市民の会協働講座)
- ・藤沢の歴史を感じて勾玉を作ろう  
(藤沢市郷土歴史課協働講座)
- ・秋の自然ウォッチング  
(神奈川県立生命の星・地球博物館連携講座)
- ・行ってみよう！農場探検  
(日本大学生物資源科学部附属農場協働講座)

### 事例1 「セミの羽化を見に行こう！」

2008年(平成20年)から毎年夏期に市民との協働事業の一つとして藤沢市域で活動している団体「藤沢市みどりいっぱい市民の会(以下、市民の会)」と共催で、夜間の自然観察会を実施している。藤沢市域の自然環境の実態を知る機会を提供し環境教育に資するとともに、限られた時期にしか見ることのできない自然現象である「セミの

羽化」を観察し親子で共有できる感動体験の機会を提供するというのが、当講座の要旨である。

市民の会は、1977年(昭和52年)に発足し40年にわたり藤沢市内の緑化の普及・啓発活動を行い、2017年(平成29年)の秋の褒章では緑綬褒状を受けている。この団体とこども館は、10年にわたり講座を実施している。

講座のきっかけは、市民の会の一人が藤沢の自然環境の調査を行い、セミの羽化の観察会(以下、観察会)を開いているという情報を得たのが始まりだった。観察会自体は、様々な場所で行われており、目新しいものではないが、藤沢の自然を熟知していることとこども館だからできることを融合することで、他の観察会と一味違う観察会ができると考えた。他の観察会との違いを出すためには、他の観察会を知らなくてはならない。実際に行われている観察会に参加することで、自分の求める答えを探すことにした。子どもだけに限定される観察会、親子で参加の観察会、集合して直ぐに観察に移る観察会、事前に勉強会を行う二部制の観察会、自分たちで講師を行う観察会、外部から講師を招く観察会など様々な形があることを知った。一年半懸けて徐々に自分の考えがまとまった。「親子に共通の感動と自然への興味や関心のきっかけを与える場にする。」これが10年続く講座の基本的な考えになった。

感動は、やはり親子で体験して欲しい。家族で参加することで共通の思い出をつくり、家族の会話になることを願って、対象は小学生を含む親子とした。実施する日程についても、家族が参加しやすい日を調査した。自然への興味や関心のきっかけを与える場として楽しく学べる勉強会を行う二部構成にした。

勉強会では、現在、学生ボランティアが活躍している。実施当初、学生ボランティアは、観察会が夜間の野外観察であることから、参加者の安全確保が主たる役割として考えていた。回を重ねると学生達から「事前に勉強会の内容を知りたい」、「藤沢市周辺で見られるセミの抜け殻を見てその種類の同定ができるようになりたい」と申し出があった。学生の要望の下、学生ボランティアのセミプロ育成講座を実施すると勉強会で予想外の展開が見られた。事前に知識を得ることで学生に余裕が生まれた。講師の話をしている子どもの様子を読み取り、理解に苦しんでいる子どもを見つ

けると理解の程度にあわせて個別指導が行われるようになった。参加者の定員を20家族としている中、学生ボランティアは、毎年10人程度の参加がある。一家族又は二家族に一人の学生が一緒になり、参加者に対し細やかなサポートができる体制が生まれ、学ぶ機能の充実が図られると共に学生と参加者の距離が飛躍的に縮まることになった。

## 事例2 「行ってみよう!農場探検」

日本大学生物資源科学部(以下、日本大学)の農場を活用した連携事業をしたいと農場長から話があり2008年(平成20年)から始まった。日本大学は、こども館のある小田急線江ノ島線の湘南台駅の隣駅六会日大前にあり、キャンパスに隣接して農場がある。農場の大きさは、東京ドーム約6個分で野菜、花、果樹などの栽培や乳牛、肥育牛、豚、羊、鶏などの飼育を行っている。この農場を活用した連携事業は、「親子農業体験」、「親子もちつき大会」そして「行ってみよう!農場探検(以下、農場探検)」と形を変えて2017年(平成29年)まで10年続いている。

連携事業実施の初年度は、試行錯誤の年となった。5月から11月の間に5回実施の講座としてサツマイモの植え付けや野菜の種まきから収穫までの農作業を体験する「親子農業体験」、12月に1回完結型の講座としてもち米とうるち米の違いなどお米について学び、自分たちで杵と臼でもちつきを体験する「親子もちつき大会」を実施した。

年に複数回実施の講座では、想定していた以上に大きな負担があった。今後も継続する事業としては、負担を減らす必要があり、1回で完結する講座を行うことになった。負担は格段に解消されたが、農場の中で食品を加工して食べることは、衛生上の問題があると指摘され、内容について再度検討することになった。

農場長が植物資源科学科の教授であったことから実施した二つの講座とも植物中心の内容であったが、一番の目的は農場を活用することであるため、植物資源科学科の学生以外にも意見を聞き巻き込むことになった。学生をどのように巻き込むかが、大きな課題となるところだが、当時、私は、日本大学に学生として在籍していたため、席を並べる学生達などから直接様々な情報を得ることができた。また、幸運にも学生が友達や後輩を連れ

てくる流れが自然にでき、学科の枠を超えて多くの学生と繋がることができた。

学生の一人から農場の中で動物達の世話をしている部活の動物資源科学術研究部が有ることを教えられた。興味を持ったので会いに行き、話を聞き、実際に部活に参加してみた。活動に参加する中で、学生が大学で学んでいる専門的知識や日頃の活動で得た経験がいかせる講座ができると感じた。新たなメンバーが加わり、学生達の意見を基にして農場の中の施設を巡る見学と学生達が農場で飼育している動物とのふれあい体験を行う農場探検が2009年（平成21年）3月15日に始まり、2017年（平成29年）まで続く子ども達に大人気講座になった。

### 多面的な発展と新たな分野への挑戦

以上が、これまでに行った講座がどのようにできたかなどのあらましである。これからの講座については、新しい課題をもって既に進めている。これまでは「自然科学の講座」に焦点を絞って実施してきたが、これからは「幅広い分野の実施」が課題であると考えている。

新たな課題に至った背景には、「環境の変化」と「変わらないこども館への期待」があった。環境の変化とは、こども館の運営が委託業務から指定管理に移行したことや気軽に短時間で参加できるワークショップを希望する人の増加など、状況の変化に対応するための一つとして、土曜日だけ実施していたオープンワークショップを日曜日に広げることで、毎週日曜日に実施していた申込制ワークショップが月に1回程度に数を減らし、自然科学の講座の比率が高い状況になった。また、変わらないこども館への期待とは、10年以上子どもと直接関わる中で「子どもたちに様々な世界を知る機会」や「子ども達がそれぞれの興味や関心を持てるものに出会える機会」を提供することが、今も昔も変わらず望まれていることが分かった。

幅広い分野を実施するためには、「多面的な発展」と「新たな分野への挑戦」が方法としてあると考え現在進めている。

多面的な発展とは、一つの講座に対し様々な側面を持たせることである。例えば、農場探検では、自然科学に関わる面だけでなく、サツマイモ

が戦前の藤沢の農業生産額1位を占め経済の基本になっていたこと、国内ワイン生産量日本1位の工場が藤沢にあるが昔はサツマイモを使って焼酎を作る工場であったことなど、自然科学をきっかけに、産業や歴史などに興味や関心が広がるような取り組みを試みている。

新たな分野への挑戦とは、こども館で今まで実施していなかった分野に挑戦することだ。例えば考古学である。こども館には、考古学に係わる資料は全くないが、子どもに係るノウハウは十分にある。藤沢市の郷土歴史課には、36,000点を超える考古資料はあるが、藤沢市には博物館がなく伝える場所がない。このように双方の利点をいかし、短所を補い合いながら取り組みを進めている。

多面的な発展と新たな分野への挑戦は、始まったばかりで、新たな分野の「知識」「経験」「情報」を得るために奔走している最中である。日々、様々なものに興味や関心を持ち積極的に行動するようにしている。近年、講座の申込名簿を見て二階堂の名前があり驚かれた方や講演会などで登壇して話をしている時に私の存在に気づき驚かれた方は、神奈川県博物館協会の中に少なくないと思うが、理由はここにあるのでご容赦いただきたい。

### おわりに

これまで私が進めてきた教育普及事業では、多くの人に支えられ「市民協働」、「学生ボランティアの活用」、「連携事業の実施」の形として、多くの子ども達に様々な体験を提供することができた。決して一人でなし得たものではなく、係わっていただいた多くの方々のお陰であり、深く感謝するところである。また、これからのについても多くの方々にご協力いただき、多くの子ども達に幅広い内容の講座を提供して行きたいと考えている。

### 謝辞

この度神奈川県博物館協会報第89号の執筆依頼を受け、改めて講演の内容を整理すると2017年（平成29年）がいかにか自分にとって節目の年であったかを認識することができた。このような節目の年に講演会の演者として推薦していただいた方々に感謝するとともに、講演会を企画し、実施していただいた神奈川県博物館協会の幹事及び事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。